HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリュートル語の分詞に関する予備的考察 ： テキストの用例から
Author(s)	永山, ゆかり
Citation	北方人文研究, 5, 123-139
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49287
Type	departmental bulletin paper
File Information	09journal05-nagayama.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アリュートル語の分詞に関する予備的考察：テキストの用例から

永山ゆかり
北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター

1. はじめに

アリュートル語[1]で伝統的に「分詞」と呼ばれる形式は動詞語幹に接尾辞***-lʔ***および絶対格の接尾辞を付加することで形成される。この接尾辞***-lʔ***を伴う形式は多機能であり、動名詞・形動詞・分詞いずれの枠にも収まりきらない性質があるが、本稿では従来の記述に従い分詞と呼ぶことにする。アリュートル語の分詞は形態上は普通名詞と同一である。以降、分詞は太字斜体で、主要部名詞は下線で表わす。

(1) アリュートル語の分詞 (Eng. participles / Russ. prichastia)
　$\boxed{\text{動詞語幹}}$-$\boxed{\text{接尾辞}\ \textit{-lʔ}}$-$\boxed{\text{絶対格}}$

(2) eɣəv　ɣəmnan　lʲuda　[bolʲnitsa-k　***it-ə-lʔ-ə-n***]
　昨日　わたし.ERG　PSN.ABS.SG　病院-LOC　いる-E-PTCP-E-ABS.SG
　t-ə-juʕ-ə-n
　1SG.A-E-訪れる-E-3SG.SG
　「昨日わたしは病院にいるリューダを訪れた」 (NVM: 2000-03-27)

(3) [mitiv　***juʕ-ə-lʔ-ə-turu***　čikako-nak]
　明日　訪れる-E -PTCP-E-2PL.PRED　PSN-ERG.SG
　iɣənʲŋinak　kətvəl　maŋkət　a-lqə-l-la-ka.
　だから　PROHIBITION　どこへも　NEG-行く-PLUR-NEG
　「明日あなたがたのところへ智香子が来るから、どこにも行かないでね」(NVM: 2000-04-05)

普通名詞とは異なる点として、普通名詞と併置されてその名詞を修飾するという形容詞的な性質や、名詞項や付加詞をとることができるという定形動詞と共通する統語的性質を持つことがあげられる。しかし先行研究である Kibrik et al. (2004)では、分詞が動詞語幹から接尾辞***-lʔ***によって派生し、語彙化したものは名詞と同様に格変化するということ、また分詞が関係節の主要部名詞を標示するということが簡略に述べられているにすぎず、名詞や動詞との統語的な機能の相違についての記述は不十分である。そこで本稿では、第 2 節で分詞の形態的特徴についてまとめ、さらに第 3 節でほかの品詞との比較における分詞の統語的特徴についてテキストの用例を中心に記述を行ない、分詞が (A)能格の名詞項を他動詞主語としてとる、(B)副詞によって修飾される、(C)斜格の補語をとるなど、定形動詞と共通する統語的特徴を持つことを示す。

これに加えアリュートル語には、チュクチ語で受動分詞(passive participles)あるいは結果分

---

[1] アリュートル語（Alutor）はロシア連邦コリヤーク自治管区で話されている言語で、民族人口は推定 2,000 人程度、話者は推定 100 人の言語である。チュクチ・カムチャッカ語族に属し、同系の言語にはチュクチ語、コリヤーク語などがある。アリュートル語の音素目録は次のとおりである：p, t, k, q, ʔ, v, s, ɣ, ʕ, m, n, nʲ, ŋ, l, lʲ, r, w, j, i, e, a, o, u, ə.

なお、本研究はさまざまな助成を受けて行なわれたが、そのうち主なものは科学研究費補助金 (特定領域研究 A) 「環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究」(代表:宮岡 伯人; 研究課題番号:11171101; 1999 年度-2003 年度)および日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「アリュートル語を中心としたチュクチ・カムチャッカ語族諸語の記述的・類型的研究 」 (研究課題番号:03J09709; 2003 年度-2004 年度)である。

詞(resultative participles)と呼ばれる *-jo* 分詞(Dunn 1999)、コリヤーク語の JQ 分詞(呉人 2008)に相当する形式もあるが、生産性や機能の点で上記の接尾辞 *-lʔ* を伴う形式とは著しく異なっている。先行研究ではこれらの形式は分詞とはみなされておらず、現時点ではこれを分詞とみなす根拠が乏しいため、本稿でもそれに従い分詞からはひとまず除外しておく。しかし同系言語の分詞との関連は明らかであることから、分詞と関連する形式として接尾辞 *-ju* および接尾辞 *-lqəl* をとりあげ、それぞれの用例と機能を 4 節および 5 節で簡略に記述する。

1.1. アリュートル語文法の概要

アリュートル語は絶対格・能格型の言語であり、接辞や語幹合成による語形成が生産的におこなわれる。名詞は必ず格接尾辞をともない、一部の 2 音節語を除き語幹がそのまま表われることはない。普通名詞は絶対格においてのみ単数／双数／複数を区別する。

動詞には主語と目的語の人称・数が義務的に標示され、主語や目的語を表わす名詞は省略されることが多い。動詞が自動詞活用と他動詞活用のいずれをとるかは動詞によって決まっており、いずれの屈折接辞もとりうる語幹は少数である。

語順は自由である。複合語では前部要素と後部要素の配列順序が決まっており、修飾要素が被修飾要素に先行する。形容詞は絶対格でのみ人称・数を区別し、斜格の接尾辞をとることはない。斜格では形容詞語幹は名詞語幹にとりこまれる。

1.2. チュクチ・カムチャッカ諸語の分詞に関する先行研究

チュクチ・カムチャッカ諸語の文法記述において分詞の定義はおおむね一致しており、英語では participles、ロシア語では prichastiia とされている。Dunn (1999)および Iailetkan (1980)は動詞の自他によって分詞を受動分詞と能動分詞に分類しているが、それ以外では接尾辞 *-lʔ* は自動詞語幹にも他動詞語幹にも付加するとされている。ここにあげた 7 点のうち、接尾辞 *-jo* あるいは *-ju* が付加された形式を分詞と分類しているのは Skorik、Dunn、呉人だけで、他では記述がないか、あるいは派生名詞として分類されている。アリュートル語の先行研究では、チュクチ語およびコリヤーク語の *-jo* に相当する接尾辞 *-ju* についてはほとんど記述がなく、Nagayama 2003 が名詞の派生接辞として数例をあげているにすぎない(Nagayama 2003: 17)。

表 1：チュクチ・カムチャッカ諸語の分詞

言語	出典	分詞の種類
Chukchi	Skorik 1961 (345-386)	動詞語幹 + 接尾辞-lʔ：能動分詞 他動詞語幹 + 接尾辞-jo：受動分詞 動詞語幹 +e-/a-...-kəlʔin：否定分詞
Chukchi	Dunn 1999 (138-144)	自動詞語幹 + 接尾辞-lʔ：能動分詞 他動詞語幹 + 接尾辞-jo：受動分詞 動詞語幹 +e-/a-...-kəlʔin　否定分詞
Koryak	Zhukova 1972 (85-86; 137-144, 262-265)	(動詞語幹 +-lʕ：行為者名詞) ɣe-動詞語幹-lin[2]：分詞

---

[2] この形式は一般的には resultative とされており、Zhukova は共時的には分詞は resultative (Zhukova の分類では第 2 過去)であるとしている (Zhukova 1972: 262-263)。しかし Dunn (1999:139) が *-lʔ*/*-jo* の違いを能動/受動ではなく、non-resultative/ resultative の違いである可能性もあると指摘していることから、アスペクトと何らかの関連がある可能性がある。

		(動詞語幹+-jp：　派生名詞) (動詞語幹+-jp-lqəl：派生名詞)
Koryak	Iailetkan 1980 (203-206)	自動詞語幹[3] +-lʕ：能動分詞 他動詞語幹 +-lʕ：受動分詞
Koryak	呉人 2008 (19-31)	動詞語幹 +-lʕ：現在・過去時制の分詞 動詞語幹 +-jp-lqəl：未来時制の分詞
Alutor	Kibrik et al. 2004 (266, 327-332)	動詞語幹 +-lʔ：分詞 動詞語幹 +a-...-kəlʔin　否定分詞
Alutor	永山 2003 (17; 116)	動詞語幹 +-lʔ：分詞 (動詞語幹 +-jμ：派生名詞) 動詞語幹 +a-...-kəlʔin　否定分詞

特異なのは Zhukova (1972)で、ほかの先行研究で分詞とされている接尾辞*-lʕ*による形式を「行為者名詞」と位置づけ、*ɣe-...-lin* による形式を分詞としている。ただし Zhukova のいう行為者名詞は名称こそ異なるものの Skorik のいう接尾辞*-lʔ*による分詞とほぼ一致しており、Skorik と同様に動詞語幹、名詞語幹、形容詞語幹、副詞語幹から形成されるとしている (Zhukova 1972: 137-144)。ただし、Skorik は接尾辞*-lʕ*による分詞が自動詞語幹からのみ形成されるとしているのに対し、Zhukova は「行為者名詞」が自動詞語幹からも他動詞語幹からも形成されるとしている[4]。

先行研究で指摘されている分詞の特徴をまとめると次のようになる。

(4) 分詞の特徴
- 絶対格でもちいられ、自動詞主語または他動詞目的語と格・数において一致する
- 名詞を修飾することができる
- 主要部名詞を伴わずに、それ自体が名詞としてふるまうことがある[5]
- 名詞化した分詞(nominalized participles)は格変化する (Kibrik et al. 2004: 266)
- 関係節が他動詞から派生した分詞を含み、他動詞主語が主要部名詞である場合、他動詞主語を絶対格に昇格するために、逆受動などの操作により動詞を自動詞化する (Kibrik et al. 2004: 266, 328; 呉人 2008: 24-25)

1.3. 調査方法と集計結果

調査に用いた資料は表 2 のとおりである。(I)はアリュートル語の話し手がキリル文字を用いて書いたもの、(II)および(III)は音声資料を文字に起こしたもの、(IV)は基礎語彙調査の際に作例によって得られた例文をまとめたものである。(III)については話者の頭文字と資料の再録年およびテキスト中の例文番号を、(IV)については話者[6]の頭文字と資料の再録年(月日)

---

[3] 他動詞語幹から能動分詞(deistvitel'nye prichastiia)を形成するには語幹に接頭辞 *ine-/ena-*を付加する必要がある(Iailetkan 1980: 204)、つまり自動詞化する必要があるとしている。

[4] 接尾辞*-lʔ/-lʕ*が付加しうる動詞語幹の種類については、言語によって違いがある可能性もある。

[5] 分詞が単独で名詞としてふるまうものを分詞とみなしてよいかという問題はあるが、呉人(2008)をのぞく先行研究ではすべてこのような例も含めて分詞としている。しかし呉人の指摘するように、名詞化した分詞(呉人による分類では名詞)とそうでない分詞とで、とりうる格に差があることは、少なくともアリュートル語については認められている。ただし呉人も指摘しているように、名詞化した分詞もすべての格をとりうるわけではなく、普通名詞とは異なる。

[6] 本稿で用いた資料を提供くださった方は次の通りである。ここにお名前を記して感謝の意を表する。なお

を記した。なお表にあげた数字に否定形および語彙化した例は含まない。

表 2：アリュートル語テキスト資料中の分詞の出現頻度

出典	テキスト数	センテンス数	分詞を含むセンテンス数
(I) Kilpalin 1993	9	916	43
(II) Kibrik et al. 2003	41	1284	64
(III) 永山収集テキスト	42	約 4500	86
(IV) 永山収集:語彙調査にともなう作例	—	約 600	20
合計	92	7300	214

2. 分詞の形態的特徴

2.1 分詞を形成する接尾辞

動詞語幹に接尾辞 *–lʔ* をつけることで形成される。子音 *–l* が口蓋化したり、挿入母音を含む場合もある。

(5) səɣe+p itqə–lʔ–ə–n
砂+隠れる-PTCP-E-ABS.SG
(the one) hidden in the sands (Kibrik et al. 2004: Text018-019)

(6) təʕəl–ləʔ–ə–n
患う-PTCP-E-ABS.SG
「病人」(Kibrik et al. 2004: Text024-012)

2.2 接尾辞-lʔ の付加する語

テキストの用例において、接尾辞 *–lʔ* の付加する語は自動詞語幹(2)が大多数であり、他動詞語幹(3)に付加する例は比較的少ない[7]。

表 3：動詞の種類によるアリュートル語分詞の割合

出典	自動詞語幹	他動詞語幹	自他の比率 vi / vt (%)
(I) Kilpalin 1993	40	3	93/7
(II) Kibrik et al. 2003	49	15	77/23
(III) 永山収集テキスト	780	6	93/7
(IV) 永山収集:語彙調査にともなう作例	16	4	80/20
合計	185	24	88/12

また接尾辞 *–lʔ* は逆受動(7)や抱合(8)によって自動詞化した他動詞語幹にも付加する。

生年はかっこで示した。NVM Nutayulgin V. M. (1964); IMP Ivnako M. P. (1928); CLI Chechulina L. I. (1957), CMN Chechulina M. N. (1935-2010); GTN Golikova T. N. (1937-2009); MDA Mulinaut D. A. (1919-2011); UAA Ulei A. A. (1914-2003); VNI Voronova N. I. (1948); KNI Kamak N. I. (1943); PMI Pritchina M. I. (1926-2008) (アルファベット順、敬称略).

[7] なお同じ接尾辞が名詞などについて「(名詞)を持っている」という意味の名詞をつくるが、これは proprietive として本稿では扱わない。アリュートル語の proprietive について詳しくは Nagayama (2006)および永山 (forthcoming)を参照のこと。Skorik (1961) および Zhukova (1972)は、本稿では除外した名詞・形容詞・副詞に付加するものも含めて「分詞」あるいは「行為者名詞」と呼んでいる。

(7) to　　ɣa-nŋiv-lin　　ʕujamtawilʔ-ə-n　　[*in-et-ə-lʔ-ə-n*]
そして　RES-送る-RES.3SG.P　人間-E-ABS.SG　ANTI-持ってくる-E-PTCP-E-ABS.SG
「そして、ある人をガイドとして送った」(Kibrik et al. 2004: Text030-008)

(8) ...ənnu　　təlłə-ɣiŋ-ki　　[*ʕałə-piri-lʔ-ə-n*]　　vissa-tkən
彼:ABS.SG　入口-下-LOC　手斧+E-抱える-PTCP-E-ABS.SG　立つ-IPFV:3SG.S
「...彼は手斧を持って入口に立っていた(*lit.* 手斧を抱えた彼は...)」
(Kibrik et al. 2004:Text018-014)

2.3 分詞の否定形

動詞語幹に否定の接辞を付加することで「〜しない／していないもの」という否定の分詞をつくることができる。アリュートル語の否定形は語類によって異なる形式がもちいられるが、否定の分詞は形容詞の否定形と同形である。

(9) 分詞の否定形：$\boxed{\text{動詞語幹}}$+$\boxed{\text{否定接辞a-...-k}}$-ə-$\boxed{\text{分詞lʔ}}$-in

以下に名詞、形容詞、分詞の否定形をあげる。

(10) *alvalʔin*　　lawət
異なる>3SG　頭.ABS.SG
「(それは魚の)頭ではない」(IMP-2002: Ants.040)

(11) *a-tur-k-ə-lʔ-in*　　< n-ə-tur-qin
NEG-若い-NEG-PTCP-3SG　ADJ-E-若い-ADJ>3SG
「若くない」　「若い」

(12) iɣənŋinak　allə　*a-lla+mla-k-ə-lʔ-in*
だから　NEG　NEG-目+つぶる-NEG-E-PTCP-3SG
「だから(神さまは)まばたきをしないんだよ」(CMN-2004: Cards.005)

3. 分詞の統語的特徴

分詞は名詞に付加するのと同様の格接尾辞を伴い、形態上は名詞と同一である。しかし普通名詞とは統語上のふるまいが異なり、名詞的な特徴と形容詞的な特徴、また定形動詞と共通の特徴をあわせ持つ。コリヤーク語について呉人(2008: 21)は接尾辞*-lʕ*をともなう形式のうち主要部名詞を伴うものを分詞、単独で用いられるものを名詞として区別しているが、アリュートル語では主要部名詞を伴わない形式の中にも定形動詞と共通する統語的性質を持つものがあり、典型的な名詞とは同列にできない。Kibrik et al. (2004: 267)はアリュートル語では分詞がしばしば主要部名詞を伴わずに用いられることを指摘している。

表3：名詞・形容詞・分詞の用法の相違

	名詞	形容詞	分詞
斜格をとる	○	×	×
動詞の主語／目的語になる	○	×	○
名詞を修飾する	×	○	○
1人称・2人称の述語接辞の付加	○	○	○
所有形による修飾	○	×	○
所有形接尾辞(-in/-nin/-kin)の付加	○	×	×

3.1 名詞的特徴

分詞は絶対格の接尾辞をとり、単数／双数／複数を区別する。これらは普通名詞につく接尾辞と同一である。

(13)　*tam-ə-lʔ-ə-n*(単数)／ *tamə-lʔ-ə-t*(双数)／ *tam-ə-lʔ-uwwi*(複数)
殺す-E-PTCP-ABS.SG　殺す-E-PTCP-ABS.DU　殺す-E-PTCP-ABS.PL
「殺された人」(Kibrik et al. 2004: Text022-066 / Text022-051 / Text019-073)

分詞は絶対格で自動詞の主語(14)／他動詞の目的語(15)の位置に立ちうる。

(14)　to　ənŋin　[ana　*qura+ləʕu-sqiv-ə-lʔ-uwwi*]　ənŋin
そして　ほら　おそらく　トナカイ＋探す-しに行く-E-PTCP-ABS.PL　ほら
ɣ-iv-laŋ
RES-言う-RES.3PL.S
「そしてその、おそらくトナカイを探しに来た人たちが言った」
(GTN-2005: Japanese.045)

(15)　to　ənŋin　na-mal+ɣito-n　[ənän-nüs　*aŋinməsʔat-ə-lʔ-ə-n*]
そして　その　LOW.A-よく+見る-3SG.P　ひとり-BY　話す-E-PTCP-E-ABS.SG
「そして(彼らは)一人(二役)で話しているの(=娘)をしっかりと見た」
(IMP-2002: FoxFamily.043)

分詞が所有形(possessive)によって修飾されている例が確認されている。テキストの用例中、所有形によって修飾されている分詞は主要部名詞を伴わずに単独で出現している場合に限られること、またこれは典型的な名詞と共通する特徴であるということを考えると、これらの形式は分詞が語彙化しているものと考えられる。以下の例の「嫁をもらいに来た者」および「橇のレースの参加者」はいずれも普通名詞としてテキスト中に頻出する語である。

(16)　...*ənək+ŋavakk-in*　*ŋavənʲnʲu-lʔ-ə-n*
...彼の+娘-POSS>3SG　嫁をもらう-PTCP-E-ABS.SG
「彼の娘を嫁にもらいに来た者」(GTN: Husband-to-be.005)

(17)　iɣum kaɬ-ɬa-t　[*ʕita-lʔ-u*　*ɣamɣa-nəm-kina*]
集まる-PLUR-3NSG.S　橇のレースに参加する-PTCP-ABS.PL　各-村-POSS>3PL
「それぞれの村の(トナカイ橇の)レーサーが集まった」(Kilpalin 1993: 118)

上記以外にも語彙化しているとみられる分詞が多数ある。語彙化した分詞の特徴として動詞で表わされる行為に恒常的に従事している者、つまり職業を表わしている例(シャーマン、戦士、漁師、トナカイ牧夫など)が多い。それ以外には死人、病人などがあり、いずれの場合も人間を表わす名詞となっている。単独で出現する分詞が人間を表わすということはチュクチ語について Skorik がすでに指摘しているが、アリュートル語でも同様と見てよい。

(18) aŋaŋta-lʔ-ə-n 「シャーマン (lit. 歌う人)」 < aŋaŋta- 「歌う」
(19) makla-lʔ-ə-n 「客」<*maklal-lʔ-ə-n <maklat- 「(人・場所を)訪れる」
(20) ramkisi-lʔ-ə-n 「客」 <ramkisi- 「宿泊する」
(21) tannŋisit-ə-lʔ-ə-n 「戦士、兵士」<tannŋisit- 「戦う」
(22) teŋat-ə-lʔ-ə-n 「漁師」<teŋat- 「魚をとる」
(23) taɣərninŋ-ə-lʔ-ə-n 「猟師」<ta-ɣərnin-ŋ- 「猟をする」
(24) viʕ-ə-lʔ-ə-n 「死人、故人」<viʕ- 「死ぬ」

ただし職業を表わす場合には接尾辞*-lʔ*のかわりに接尾辞*-sʔ*が用いられることもある。接尾辞*-sʔ*はほかに、恒常的な性質を表わす場合にも用いられると考えられる。

(25) ɣəntiit-ə-sʔ-ə-n 「夜番のトナカイ牧夫; 見張り」<ɣəntiit- 「見張る」(NVM)
(26) taraŋ-ə-sʔ-ə-n 「大工」<taraŋ- 「家を建てる」 (NVM)
(27) milɤəŋta-sʔ-ə-n 「蛾」 <milɤəŋta- 「火を取りに行く」(NVM)

なお上記の「歌う者=シャーマン」のような形式でも主要部名詞を伴う場合はシャーマンの意味にはならず、動詞本来の意味が保たれる。

(28) numal　na-valum-ə-n　ənnu　[*aŋaŋta-lʔə-n*]
　また　LOW.A-聞く-E-3SG.P:PFV　彼女.ABS.SG　歌う-PTCP-E-ABS.SG
　「彼らは再び彼女が歌っているのを聞いた」(Kibrik et al. Text013-014)
(29) ŋanuno　qətkinnaqu=qi　jat-ə-tkə　anam　[*ramkisi-lʔ-ə-n*]
　ほら(遠称):EMP　PSN:ABS.SG=EMP　来る-E-IPFV:3SG.S　?　宿泊する-PTCP-E-ABS.SG
　「ほらあそこ、Qがうちに泊まりに来たよ」(GTN-2006: Ladle.040)

ほかに、分詞が斜格で表われる例が数例確認されている。以下は能格、与格、様態格の例である。いずれも主要部名詞を伴わないほか、意味の面からも語彙化している例と考えられる。上述のように名詞化した分詞が斜格をとりうることは Kibrik et al. (2004: 266)が指摘している。

(30) ana=q　ɣa-nm-ə-lin　... *tannŋəsit-ə-lʔ-a*
　おそらく=EMP　RES-殺す-E-RES.3SG.P　戦争する-E-PTCP-ERG
　「きっと軍人が(その人を)殺してしまったのだろう」(GTN-2005: Japanese.054)
(31) ...*tʃəl-lʔ-ə-ŋ*　ralqiv-i
　...患う-PTCP-E-DAT　入る-3SG.S:PFG
　「(シャーマンは到着するやいなや)病人のほうに入ってきた」(Kibrik et al. 2004: Text029-019)

(32) ɣəmmə=ʔa　*aŋinm̄əsʔat-ə-lʔ-u*　m-it-ə-lqiv-ə-k
わたし.ABS=EMP　話す-E-PTCP-ESS　OPT.1SG.S-ある-E-INCH-E-1SG.S:PFV
「わたしが通訳になろう」(Kibrik et al. 2004: Text010_Sisisen.039)

ただし主要部名詞を伴わない分詞のうちには定形動詞と同様の補語をとっている例もあり、主要部名詞がないものであっても名詞化の度合いが低いと考えられるものもある。

なお、主語が1人称および2人称の場合、普通名詞に付加するのと同一の人称述語形をとる。

(33) asiqmal　*viʕ-ə-lʔ-iɣəm*　ɣəmmə
同然　死ぬ-E-PTCP-1SG.PRED　わたし.ABS
「(ひどいめにあって)おれは死人も同然だ」(GTN-2002: Husband-to-be.034)

(34) ‥m̄ət-akmit-ə-na　ŋan　qajunünü　tumɣ-u　mət-java-tkə-naw
…1PL.A-とる-E-3SG.P:PFV　あの>3SG　少年:ABS.SG　仲間-ESS　1PL.A-使う-IPFV-3SG.P
qajunünü　*kunäntuwint-ə-lʔ-ə-muru*
少年:ABS.SG　馬に荷を乗せて運ぶ-E-PTCP-1PL.PRED
「ある少年を道案内として雇い、自分たちは馬に荷を乗せて運んでいた」
(UAA-2002: Japanese.004)

なお分詞が単独で用いられる際に、定形動詞を伴わず分詞が述語となっている例が多数ある。(35)は「彼」という主語を補って「彼は嘘つきだ」という名詞述語文にすることが可能だが、主語が省略されているほうが自然な文であると考えられる。また(36)も主語を補うことが可能だが、「急いで」という副詞によって修飾されている点で、一般的な名詞述語文とは異なっている。このような用法は特に会話では頻出するが、機能や意味は明らかではなく、今後の調査が必要である。

(35) tinɣa　ana　*tinmələ-lʔ-ə-n*
何だ　きっと　嘘をつく-PTCP-E-ABS.SG
「きっと(こいつは)嘘をついているんだよ」(CMN-1998: Swallow.119)

(36) *pəkir-ə-lʔ-ə-n*　nurala
到着する-E-PTCP-E-ABS.SG　急いで
「(Qは)大急ぎでやってきた」(IMP-2001: mice.077)

3.2 形容詞的特徴

分詞は形容詞のように絶対格の名詞と並置されて名詞を修飾することができる。語順は自由で分詞が名詞に先行しても、また後続してもかまわない。

(37) ...ana　ɣətʔav-ə-tkə　*jəlq-ə-lʔ-ə-n*　unünü-pil▪
...きっと　飢える-E-IPFV:3SG.S　眠る-E-PTCP-E-ABS.SG　子供-DIM:ABS.SG
「きっと眠っている坊やがお腹をすかせているに違いない」(IMP-2002: Ants.090)

(38) əŋe　ənŋin　nikaŋ　tanŋ-ə-tan　ɣa-la-lin
そして　その　ほら　チュクチ-E-RDP.ABS.SG　RES-来る-RES.3SG.S

ŋavənńu-sqiv-ə-lʔ-ə-n
嫁をとる-しに行く-E-PTCP-E-ABS.SG
「そしてほらあの、チュクチの男が嫁をとりに来た」(CMN-2001: Lalinawyt.015)

名詞を形容詞的に修飾している分詞を定形動詞と置き換えることが可能な場合もある。下の例で、分詞構文では分詞の意味上の主語が絶対格で表わされ、「見る」の目的語となっている。動詞は接尾辞*-(ə)t*の付加により自動詞化されている。これに対し(40)では動詞の主語が能格で表わされ、「トナカイを捕らえる」という他動詞は定形動詞の形式をとっている。(40)はひとまとまりの文として発音されるほか、話者の意識の上でも一文である。別の話者によれば(CLI)、(39)は「K が何をしているのか」という疑問に対する答で、話し手が発話時点で K を見ていないことを示す。これに対し(40)は話し手が K を見ているか否かには関わらず、「A でもなく B でもなく K がトナカイを捕らえた」という意味を表わす。

(39)　ɣəmna　t-ə-laʔu-n　kəʔusʔ-ə-n
　わたし.ERG　1SG.A-E-見る-3SG.P　PSN-E-ABS.SG
　[*wərat-ə-lʔ-ə-n*]
　投げ縄でトナカイを捕らえる-E-PTCP-E-ABS.SG
(40)　ɣəmna　t-ə-laʔu-n　kəʔusʔ-ə-nak
　わたし.ERG　1SG.A-E-見る-3SG.P　PSN-E-ERG.SG
　wəra-nin
　投げ縄でトナカイを捕らえる-3SG.A>3SG.P:PFV
　「わたしはKがトナカイを捕らえたのを見た」(VNI: 1999-08-01)

3.3 分詞の動詞的特徴

分詞は格接尾辞をとることから形態上は名詞と同じであるといえるが、(A)能格の名詞項を他動詞主語としてとる、(B)副詞によって修飾される、(C)斜格の補語をとるなど、定形動詞と共通する統語的特徴を持っている。

(A) 能格主語

他動詞から派生した分詞の意味上の主語が能格で表わされることがある。テキスト中に確認されたのは(41)のみで、絶対格である分詞と一致した絶対格形が期待される他動詞主語が*ətɣənan*「彼ら」という能格で現れている。Kibrik et al. (2004:43) は能格で現れた分詞の意味上の主語を絶対格の 3 人称代名詞で置き換えることも可能であることを指摘している。(42)でも同様に、「使っている」という分詞の主語を *ɣəmna*「わたし」という人称代名詞の能格形で表わしているが、これは *ɣəmnina*「わたしの」という所有形で置き換えることも可能である。

(41)　ətɣənan　[*sissəŋ+quli+javasʔat-ə-lʔ-u*]
　彼ら.ERG　こっそり+歌+使う-E-PTCP-ABS.PL
　「彼女らは(わたしの)歌をこっそり歌っていた」(Kibrik et al. 2004: Text008-067)
(42)　artista-ta　na-java-tkə-na　pəlak-u　[ɣəmna　*java-lʔ-u*]
　ダンサー-ERG　LOW.A-使う-IPFV-3PL.P　ブーツ-ABS.PL　わたし.ERG　使う-PTCP-ABS.PL
　「ダンサー達はわたしの使っているブーツを使っている」(CLI-2012)

このような分詞の意味上の主語と分詞との格の不一致はまれであると考えられるが、現時点で得られている例が少ないため、今後の詳細な調査が必要である。

なお他動詞語幹から派生した分詞の意味上の主語は、上記のように能格・絶対格・所有形で表わされるほか、人称述語形で表わされることもある。

次の例では「(動物などを)解体する」という他動詞の意味上の主語は単独の語では表わされていないものの、1人称の人称述語形 *-muru* によって明示され、分詞が主動詞である「嫌う」という他動詞の直接目的語となっている。「解体する」という他動詞の目的語である「鯨」はここでは明示されていない。

(43)　...məri　ʕanq-u　na-lŋ-ə-la-tkəni-mək　[*alvatə-lʔ-ə-muru*]
...なぜなら　嫌う-SUFF　LOW.A-AUX-E-PLUR-IPFV-1NSG.P　解体する-PTCP-E-1PL.PRED
「わたしたちは(鯨を)解体することを許されていないから」(Kibrik et al. 2004:Text023-014)

また、同じ動詞が直接目的語として「鯨」という名詞語幹を抱合し「鯨を解体する」という意味の自動詞となっている場合にも、意味上の主語が人称述語形によって表わされている。

(44)　mik-ə-nak　ʕanq-u　na-lŋ-ə-tkəni-tək　[*juŋju+ʔalvat-ə-lʔ-ə-turu*]
...誰-E-ERG.SG　嫌う-SUFF　LOW.A-AUX-E-IPFV-2NSG.P　鯨+解体する-E-PTCP-E-2PL.PRED
「誰がおまえたちに鯨を解体することを許さなかったのか」(Kibrik et al. 2004:Text023-015)

(B) 副詞による修飾

分詞は「甚だしい」「よく」などの副詞による修飾が可能である。

(45)　tumɣ-a　wit-u　na-lŋ-ə-tkəni-ɣəm
仲間-ERG　驚く-SUFF　LOW.A-AUX-E-IPFV-1SG.P
[aɣi　*maslu-lʔ-iɣəm*]
甚だしく　バターを食べる-PTCP-1SG.PRED
「友達はわたしがバターをたくさん食べるのに驚く」(NVM; 2000-03-25)

(46)　pəsa　van　ən　ŋan-ə-k　[a-mal-ka　*junat-ə-lʔ-u*]
ひとまず　EMP　EMP　その-E-LOC　ADV-よい-ADV　暮らす-E-PTCP-ABS.PL
allə　a-nika-ka
NEG　NEG-(DUMMY)-NEG
「(彼らは)とりあえず幸せに暮らしていた。何不自由なく」(CMN-2001: Lalinawyt.028)

分詞はまた、場所を表わす語を補語としてとる。

(47)　‥ənnŋin　ŋavəsqatpil■　ɣa-ŋərʔav-lin　ənŋin　walv-uwwi
…その>3SG　少女:ABS.SG　RES-腹をたてる-RES.3SG.P　ほら　カラス-ABS.PL
[ɣərɣul　*walʔat-ə-lʔ-u*]…
上に　座る-E-PTCP-ABS.PL
「その少女は上のほうにとまっているカラスに腹をたてた」(IMP-2001-CrowFamily.007)

(48)　počta　　maŋinäs　　na-nwaŋtat-ə-n　　varat
郵便局:ABS.SG　　いつ　　LOW.A-開ける-E-3SG.P:PFV　　人々:ABS.SG
[*uʔalla-lʔ-ə-n*　　ɣarɣənuk]　　ralqivəlʔat-ə-k　　ŋəvu-jji
待つ-PTCP-E-ABS.SG　　外で　　入る-E-INF　　始める-3SG.S:PFV
「郵便局が開くと、外で待っていた人々は一斉に入り始めた」(NVM: 2000-03-28)

(49)　nik　　ənŋin　　ŋəpa-tkə　　ŋan　　[ɣətɣə-lq-ə-k
(DUMMY)　　ほら　　水から出る-IPFV:3SG.S　　あの　　湖-表面-E-LOC
it-ə-lʔ-ə-n]　　tiniʕəŋawət
いる-E-PTCP-E-ABS.SG　　PSN:ABS.SG
「そしてほら、湖の表面にいたTが出てきた」(IMP-2001: Tukamak.061)

(C)斜格補語

分詞は斜格の名詞を補語としてとりうる。自動詞 *kur-/-tkur-*「…から来る」は補語として場所格または沿格の名詞を要求する。(50)では「…から来る」という自動詞語幹から派生した分詞の補語となる「町」が沿格で現れている。(51)は同じ動詞が定形動詞として用いられている例で、同じく補語が沿格で現れている。

(50)　wajamla-lʔ-u　　[ɣorod-ɣəpə　　*kur-ləʔ-u*]　　wajamla-ŋ
PLN-PROP-ABS.PL　　町-PROL　　から来る-PTCP-ABS.PL　　PLN-DAT
ret-ə-lqiv-ə-k　　ŋəvu-la-t
帰宅する-E-INCH-E-INF　　始める-PLUR-3NSG.S:PFV
「町から戻って来たW村の人々がW村に帰りはじめた」(NVM: 2000-03-28)

(51)　ɣəmmə　　t-ə-tkur-ə-k　　səkol-epəŋ
わたし.ABS.SG　　1SG.S-E-から来る-E-1SG.S:PFV　　学校-PROL
「わたしは学校から来た」 (Kibrik et al. 2004: 548)

3.4 分詞の時制

アリュートル語には時制の区別がなく、過去／現在／未来は法とアスペクトの組み合わせによって表わされる。上述の例にもあるように、分詞はテキストの用例では過去や現在の行為について用いられていることが多いが、これから起こる行為について分詞で表現することも可能である。

(52)　[mitiv　　*juʕ-ə-lʔ-ə-turu*　　čikako-nak]　　iɣənŋinak　　kətvəl
明日　　訪ずれる-E -PTCP-E-2PL.PRED　　PSN-ERG.SG　　だから　　PROHIBITION
maŋkət　　a-lqəl-la-ka.
どこへも　　NEG-行く-PLUR-NEG
「明日あなたがたのところへ智香子が来るから、どこにも行かないでね」
(NVM: 2000-04-05) (=3)

(53)　[*təlqətat-ə-lʔ-u*]　　kanvit-u　　ʃkaf-ə-k　　t-ə-ntilpat-ə-na
持っていく-E-PTCP-ABS.PL　　飴-ABS.PL　　戸棚-E-LOC　　1SG.A-E-隠す-E-3PL.P:PFV
kətvəl　　a-nu-la-ka
PROHIBITION　　NEG-食べる-PLUR-NE
「(後で)持っていく飴を戸棚に隠したから食べないでね」(NVM :2000-04-05)

(54)　kristina　itɣəpat-i　[akinʔat　*jat-ə-lʔ-ə-n*]
PSN:ABS.SG　知れわたる-3SG.S.PFV　もうすぐ　来る-E-PTCP-E-ABS.SG
「(アメリカに一時帰国中の)クリスティーナはもうすぐ(村に)来るらしい」(NVM: 1998-01-05)

(55)　ʕatav=qun　inʔa　q-ə-tamasɣavŋ-ə-tkən　[eq-ə-ka　*jat-ə-lʔ-u*]
さあ+EMP　早く　2S.OPT-E-治癒する-E-IPFV:2SG.S　早い-E-STAT　来る-E-PTCP-ABS.PL
maŋka-kinaw　tanŋ+irra-wwi…
どこ-POSS>3PL　敵+隊列-ABS.PL
「早く元気になりなさい。もうじき敵がやってくるよ」(Kibrik et al. 2004: Text021-067)

(56)　jaqi　m-ə-jisi-na　ŋavjilʔalŋətumɣ-ə-ŋ　[*tu-lʔ-uwwi*]
後で　1SG.A.OPT-E-集める-3PL.P　従姉妹-E-DAT　食べる-PTCP-ABS.PL
「後で従姉妹のために食べるもの(=ベリー)をとってこよう」(Kibrik et al. 2004: Text014-057)

なお呉人(2008: 20)はコリヤーク語の分詞について接尾辞*-lʔ*による形式が現在・過去を、接尾辞*-jo-lqəl*による形式が未来を表わし、相補分布的に機能すると指摘しているが、上記の例をみる限りこの指摘はアリュートル語にはあてはまらない。

4. 接尾辞 *-ju*

チュクチ語で受動分詞を形成するとされている接尾辞*-jo*に相当する形式がアリュートル語にも認められる。Nagayama (2003: 17)では派生名詞として位置づけ、生産性は低いが、他動詞について「～されるもの」という意味の名詞を派生するとして例をあげた。この接尾辞だけで名詞を派生することができるチュクチ語とは異なり、コリヤーク語およびアリュートル語では絶対格の接尾辞が後続する。Kibrik et al. (2004)にはこの接尾辞に関する記述はない。

(57)　*tu-ju-n*　「餌、食料 (lit. 食べられるもの)」 ＜*tu-*「食べる(vt)」(NVM)
(58)　*tam-ju-n*　「(トナカイや牛などの)肉 (lit. 殺されるもの)」＜*tam-*「殺す(vt)」(NVM)

接尾辞*-ju*はアリュートル語のテキスト中には 1 例も出現しないが、語彙調査にともなう作例では数例確認されている。接尾辞 *-ju* の用法について観察すると、(59)のように接尾辞*-ju*による形式が分詞的に用いられることがある。しかし(59)を非文とみなす話者もある。その場合、*akmi-ju-n*を*akmi-ju-lqəl*に置き換えれば許容としている。接尾辞*-ju-lqəl*については次節で扱う。

(59)　*akmi-ju-n*　ənŋin　kəniɣa　kətvəl
持っていく-NMLZ-ABS.SG　その>3SG　本:ABS.SG　PROHIBITION
a-numkav-la-ka
NEG-片づける-PLUR-NEG
「その本持って行くやつだから片づけないで（lit.その持っていくべき本を片づけないで）」
(Nagayama 2003: 17; NVM)

なお、(59)で接尾辞 *-ju* はこれから実行される行為を表わし、コリヤーク語の接尾辞*-jo-lqəl*との関連性が想起されるが、(60)のようにこれから実行される行為とはいえない場合にも用いられうる。また(60)のような例をみると、この形式が定形動詞と共通の統語的特徴を持つとは考えにくく、現時点ではこの形式を「分詞」と断定する根拠が乏しい。今後の調

査を必要とする。

(60)　*ta-plaŋ-ŋ-ə-ju-n*　　t-akm it-ə-n
MAKE-ブーツ-MAKE-E-NMLZ-ABS.SG　　1SG.A-持つ-E-3SG.P:PFV
「ブーツの材料(lit. ブーツを作るためのもの)を持ってきた」(CLI-2012)

さらに、接尾辞 *-ju* が接尾辞 *-lʔ* と共起する例が得られている。接尾辞 *-ju* が付加される例とされない例との違いは明らかではない。接尾辞 *-ju* を名詞派生接辞とすると次に続く分詞接尾辞 *-lʔ* の説明がつかないが、(61)b および(62)を非文とみなす話者もおり、現時点で筆者はこれらの例の適切さについて疑問を持っている。いずれにしても今後の検証が必要である。

(61) a. [m itiv　*juʕ-ə-lʔ-ə-turu*　　čikako-nak]　(=3)
明日　訪ずれる-E-PTCP-E-2NSG.PRED　PSN-ERG.SG
iɣən ŋ inak　kətvəl　m aŋkət　a-lqəl-la-ka
だから　PROHIBITION　どこへも　NEG-行く-PLUR-NEG
b. [m itiv　*juʕ-ə-ju-lʔ-ə-turu*　　čikako-nak]
明日　訪ずれる-E-NMLZ-PTCP-E-2PL.PRED　PSN-ERG.SG
iɣən ŋ inak　kətvəl　m aŋkət　a-lqəl-la-ka
だから　PROHIBITION　どこへも　NEG-行く-PLUR-NEG
「明日あなたがたのところへ智香子が来るから、どこにも行かないでね」(NVM: 2000-04-05)

(62)　ɣəm m ə　[*juʕ-ə-ju-lʔ-iɣəm*　　likar-a]　iɣən ŋ inak　allə
わたし.ABS　訪ずれる-E-NMLZ-PTCP-1SG.PRED　医師-ERG　だから　NEG
m aŋkət　a-lqət-ka　t-it-ə-tkə
どこへ　NEG-行く-NEG　1SG.S-AUX-E-IPFV
「わたしのところへ医者が来るので、どこにも行かない」 (NVM: 2000-4-05)

上記のとおり、アリュートル語で得られているのはすべて他動詞語幹の例で、自動詞語幹には付加しない。これは、アリュートル語の接尾辞 *-ju* に相当するチュクチ語の接尾辞 *-jo* が「他動詞語幹に付加する」(Skorik 1961: 380; Dunn 1999: 138)という記述と合致している。

5. 接尾辞 *-lqəl*

接尾辞 *-lqəl* の最も一般的な用法は名詞語幹に付加され、「N となる(予定の)もの、N の材料」という意味の名詞を派生するものである。

(63)　*wala-lqəl*「ナイフの材料」<*wala*「ナイフ」(NVM)

接尾辞 *-lqəl* が動詞語幹に付加されて「V するもの」を意味する名詞を派生することができるが、生産性が低く、既刊資料中で確認されているのは次の語彙化している例 1 例のみである。

(64)　*ləʕu-lqəl*「顔、写真」< *ləʕu-*「見る」(NVM)

ほかに動詞語幹に直接付加する例が筆者収集のテキストから 1 例のみ確認されている。

(65)　taq-uwwi　ənki　*juʕ-ə-lqəl-u*　it-ə-lqiv-la-tkə-t…
何-ABS.PL　そこに　入れる-E-FOR-ABS.PL　ある-E-DUR-PLUR-IPFV-3NSG.S
「(アザラシ皮製の袋は)そこに(水鳥の卵でも)何でも入れるためのものだった」
(CMN-2004: Alutor Foods.033)

接尾辞*-lqəl*は所有形*-kin(a)*にも付加されうるという点でほかの名詞派生接尾辞とは異なっている。通常、所有形*-kin(a)*に後続しうるのは限られた格接尾辞のみで、派生接辞が後続する例はほかにない。生産性は低いとみられ、資料中で確認できたのは次の2例のみである。いずれも同じ話者によるテキスト中の連続する文で用いられている。(66)の例では先行する「移動中の食べ物、携行食」という語が主要部で、後続の所有形を含む形式がそれを修飾していると考えられる。(67)では主要部は明示されず、所有形を含む形式が名詞的に用いられている。

(66)　*inu-lqəl-u*　*winv-ə-kina-lqəl-u*
移動中の食べ物-FOR-ABS.PL　道-E-POSS-FOR-ABS.PL
「移動中の食べ物となるもの、道中の(食べ物)となるもの」(CMN-2004: Korean.066)
(67)　*winv-ə-kina-lqəl-u*　ʃtop　winv-ə-k　nuŋ-ɣətʕav-a　nəʔ-it-ə-lqiv
道-E-POSS-FOR-ABS.PL　ために　道-E-LOC　ABES-餓える-ABES　SUBJ.3SG.S-AUX-E-INC
「道中の(食べ物)となるもの、道中で餓えないために」(CMN-2004: Korean.067)

さらに、接尾辞*-lʔ*の後に接尾辞*-lqəl*が付加された形式がテキスト中に数例確認されている。これらはいずれもKibrik et al. (2004)からの例で、原典では接尾辞*-lʔ*にも接尾辞*-lqəl*にもNMLZのグロスがつけられているが、ここでは筆者の表記方式に改めた。

(68)　to　*tu-lʔ-ə-lqəl-u*　ɣa-ralqiv-lina-t　alvaŋ　mən-nu-nawwi
そして　食べる-PTCP-E-FOR-ABS.PL　RES-入る-RES-3DU.S　喜んで　OPT.1NSG.A-食べる-3PL.P
「食べられるものになるやつらが入ってきたぞ。あいつらを食べてやろう」
(Kibrik et al. 2004: Text006-039)
(69)　taq-u(wwi)　*waŋla-lʔ-ə-lqəl-u*　ulŧaʔutku-kaŋa
何-ABS.PL　乞う-PTCP-E-FOR-ABS.PL　仮面をつけて歩く-CONV
na-nisutku-lqiv-ə-tkə-na　ənŋina
LOW.A-揺らす-INCH-E-IPFV-3PL.P　それ>3PL
「仮面をつけて歩いているあいだ、乞われたものを何でも（棒にぶらさげて）揺らす」
(Kibrik et al. 2004: Text028-004)

同様の形式*-lʔ-ə-lqəl*はチュクチ語にも見られ、Skorik (1961: 365-367)はこれを義務形(*dolzhenstvovatel'naia forma*)と呼んでいる。

Dunn (1999: 141)は、接尾辞*-jp*に接尾辞*-lqəl*がつくことがあるとして2例をあげているが、いずれも「食べる」「使う」という他動詞の例である。コリヤーク語についてはZhukova (1972 : 85-86)が接尾辞*-jp*について「名詞を派生する接辞として他動詞語幹に付加する」とした上で、さらに接尾辞*-lqəl*が後続する場合があることを指摘している。呉人は接尾辞*-jp*に接尾辞*-lqəl*が添加された*-jp-lqəl*をZhukovaのいう名詞派生接尾辞とは区別して未来時制の関係節を形成

する分詞としている(呉人 2008: 20, 30-31)。

アリュートル語のテキストからはチュクチ語およびコリヤーク語の*-jp-lqəl*に相当する形式*-ju-lqəl*は確認されていないが、作例により数例が得られている。(70)は動詞語幹「煮る」に接尾辞*-ju-lqəl*が付加された形式が目的語となる「アザラシの肉」という名詞を修飾している。なおこの動詞語幹は自動詞としても他動詞としても用いられうるが(71, 72)、(70)では目的語をとっていることから他動詞と考えてよいだろう。

(70)　t-ə-svitku-n　　m ilətʔul　　*kukev-ə-ju-lqəl*
　　1SG.A-E-切る-3SG.P:PFV　アザラシの肉:ABS.SG　煮る-E-NMLZ-FOR:ABS.SG
　「料理するためのアザラシの肉を切った」(CLI-2012)

(71)　ann ākku　*kukev-ə-tkən*
　　PSN.ABS.SG　煮る-E-IPFV:3SG.S
　「A が料理をしている」(CLI-2012)

(72)　ann ākku-nak　*kukev-ə-tkə-n in*　m ilətʔul
　　PSN-ERG　煮る-E-IPFV-3SG.A>3SG.P　アザラシの肉:ABS.SG
　「A がアザラシの肉を煮ている」(CLI-2012)

接尾辞*-ju-lqəl*が付加された形式はいずれも無生物名詞を修飾する名詞句として機能している。接尾辞*-lʔ*と比較すると、他動詞語幹にのみ付加される[8]、著しく生産性が低い、テキスト中の使用頻度が低い、接尾辞*-ju-lqəl*を付加した形式が人間を表わすことはないという点で異なっている。

6. おわりに

本稿ではアリュートル語の分詞についてテキストの用例を中心に検証し、分詞が (A)能格の名詞項を他動詞主語としてとる、(B)副詞によって修飾される、(C)斜格の補語をとるなど、定形動詞と共通する統語的特徴を持つことを示した。またコリヤーク語とは異なり、アリュートル語の分詞が現在・過去のみならず、未来時制も表わすことを示した。

さらに本稿では、チュクチ語で受動分詞(passive participles)あるいは結果分詞(resultative participles)と呼ばれる*-jp*分詞、チュクチ語で義務形と呼ばれる*-lʔ-ə-lqəl*、コリヤーク語の JQ 分詞に相当する形式がアリュートル語にも認められることを指摘した。これに加え、接尾辞*-lqəl*が従来の名詞派生接辞という枠組みにはおさまらない特徴を持つことを明らかにした。ただしはじめに述べたように、これらの形式の用例はまだ数例しか得られておらず、これらを分詞と認めるべきか、認めるとすれば接尾辞*-lʔ*による分詞との相違点は何かなど、今後の課題は多い。

また先行記述で簡単に触れられている関係節との関連について、さらには分詞の意味や動作の恒常性・一時性が分詞の選択にどのように関わるかについても明らかにしていく必要がある。

---

[8] コリヤーク語でこれに相当する形式は自動詞語幹にも他動詞語幹にも自由に付加しうる。

略号一覧

A agent of transitive verb; ABES abessive case; ABS absolutive case; ADJ adjective; ADV adverb; ANTI antipassive; AUX auxiliary verb; DAT dative; DIM diminutive; du dual number; E epenthesis; EMP emphasis; ERG ergative; ESS essive; IPFV imperfective; INCH inchoative; lit. literal meaning; LOC locative case; LOW.A a marker of lower agent; NEG negative; NSG non-singular number; OPT optative; P patient of transitive verb; PFV perfective; PL plural number; PROL prolative case; PTCP participle; PLUR pluralizer; POT potential; PRED predicative; PSN person name; RDP reduplicated element; RES resultative; S subject of an intransitive verb; SG singular number; SUFF suffix of unknown function; 1 first person; 2 second person; 3 third person; - morpheme boundary.

参照文献

Dunn, M.

1999 *A Grammar of Chukchi*. Ph.D Thesis of Australian National University. (unpublished)

Iailetkan, A. I.

1980 *Fakul'tativnyi kurs po koriakskomu iazyku dlia 7-8 klassov (uchebnoe posobie)* Izdanie vtoroe, ispravlennoe. Moscow.

Kibrik, A. E., S. V. Kodzasov and I. A. Muravyova.

2004. *Language and Folklore of the Alutor People* (ELPR 成果報告書 A2-042), 大阪学院大学情報学部.

Kilpalin, K. V.

1993 *Ania: skazki severa* [Ania: tales of the North], RIO KOT: Petropavlovsk-Kamchatsky.

呉人惠

2008 「分詞および関係詞によるコリャーク語関係節の相補的形成」『北方人文研究』第 1 号, 19-40.

Nagayama, Y.

2003 *Ocherk grammatiki aljutorskogo jazyka* [Grammatical Outline of Alutor], (ELPR A2-038). Suita, Japan: Osaka Gakuin University.

2006 *Possessive Expressions in Alutor*. 北海道大学提出博士(文学)学位論文.

永山ゆかり

(forthcoming) 「アリュートル語の所有を表わす 2 つの接辞」『北方言語研究』第 2 号.

Skorik, P. Ia.

1961 *Grammatika Chukotskogo iazyka I* [A Grammar of Chukchi], Moscow-Leningrad: Nauka.

Zhukova, A. N.

1972 *Grammatika koriakskogo iazyka* [A Grammar of Koryak]. Leningrad: Nauka.

A Preliminary Study of Alutor Participles Based on Text Data

Yukari NAGAYAMA
Graduate School of Letters, Hokkaido University

Alutor participles are derived from verbal stems with the suffix *-lʔ* which is materially identical with the proprietive suffix. I have shown that Alutor participles share a number of features with finite verbs which had been overlooked in previous studies: (a) participles can have transitive subjects in the ergative case; (b) participles can be modified by adverbs; (c) participles can take oblique compliments.

I have also pointed out that Alutor has forms corresponding to Chukchi passive (resultative) participles with the suffix *-jo*, Chukchi obligative forms with the suffix *-lʔ-ə-lqəl*, and Koryak JQ participles with the suffix *-jo-lqəl*. Besides, I have shown that Alutor suffix *-lqəl* which has previously been described as a nominal derivational suffix has more complex features. The present research is largely based on naturalistic data from texts (published and unpublished); elicited data is used only occasionally to fill in gaps. The grammatical features and usages of these suffixes require further consideration.